



お米の大切さを学ぶ 大石田南小で稲刈り体験

大 石田南小学校5年生の児童が10月2日(金)に昔ながらの稲刈り作業を体験しました。

これは、横山地域農地・水・環境保全組織が伝統農法の実践や学校教育との連携のため実施しているものです。

児童たちは、慣れない鎌を手に、黄金色に実った稲を丁寧に刈り取り、その後、稲架掛けを行いました。

参加した小内凜乃さんは「稲刈りは初めてで稲が軽いと思ったけど、束ねると実際はとても重たくて大変でした」と話していました。



伝統を引き継いで 大石田北小学校で太鼓の授業

ふ るさとのよき生活文化や知恵、伝統芸能などの素晴らしい地域文化を教え合い、学び合いながら伝承していく「ふるさと塾」が大石田北小学校で行われました。

講師は、町内で活動している雪国鷹巣太鼓保存会で、10月2日(金)に班ごとに分かれ、自分たちでリズムを合わせる練習をしていました。

児童たちは令和8年度で閉校となる大石田北小学校の閉校記念式典で演奏を披露するために日々練習を重ねています。

練習に参加する6年生の柴崎潤季さんは「リズムを合わせるのが難しいけれど、伝統を引き継ぐために頑張りたいです」と話しました。



災害支援に役立てて 大石田中学校で募金を実施

大 石田中学校生徒会が9月24日(木)に大石田町役場を訪れ、熊本地震や令和8年8月千葉豪雨で被害に遭った方へ集めた募金を庄司町長に手渡しました。

これは、災害に遭われた方に対して、何かしたいという思いから実施されたものです。

この募金は町を通じて、日本赤十字社に渡され、災害の復興などに充てられます。

温かな善意をありがとうございます。

虹のプラザ文化芸術プロジェクトマネージャーコラム

「芸術の秋の楽しみ方」

vol.6

虹のプラザ文化芸術プロジェクト統括マネージャーの大橋です。

秋の時報が町に染み渡るころ、大石田の景色や香りにも季節の深まりを感じます。いつもの道、川の流れ、田畑を渡る風。毎年繰り返される風景ですが、ふと足を止めるのと去年とは違う気持ちで眺めている自分に気づくことがあります。

「芸術の秋」と言いますが芸術に触れることは作品を観たり聴いたりすることと同時にこうした日常を感じ直すことでもあるのではないのでしょうか。

私たちが取り組む大石田AIRもそのための機会の一つです。アーティストが地域に滞在し、この土地の暮らしや人と出合いながら、表現を生み出していく。そこで特に大切にしているのはアーティストの目線を通して、地域や自分自身を見つめ直すことです。私たちが何気なく通り過ぎる場所や誰かが立ち止まる。聞き慣れた音に耳を澄ませる。普段の会話の中に表現の種を見つける。その姿に触れると「ここに、そんな面白さがあったのか」と、見慣れた町に新しい輪郭が生まれます。そしてアーティスト自身も、この町との出会いによって自分の表現や考え方を問い直していきます。

大石田AIRは、誰のため、何のためにあるのか。私はこの町で暮らす私たちと、ここを訪れる人、そしてこれからの町を担う子どもたちが、まだ気づいていない地域の価値や可能性に出会うための取り組みだと考えています。

それは、町に吹き込む風のようなもの、あるいは地域の土壌をゆっくり潤す水のようなものかもしれません。出会う対話が暮らしの中に染み込み、いつか思いがけない場所から芽が出る。

大石田AIRが届けたいのは、そうした発見や可能性そのものなのです。私たちの日常には、見通しや安定が必要で、その中に少しだけ、答えの決まっていない時間や、いつもの感覚が揺らぐ余地を持つことも大切なことだと思っています。不確実さや不安定さに触れながら、「分からなけれど、もう少し見てみよう」と思える感性が、新しいものを受け止める、自分で考える力を育ててくれるのではないのでしょうか。

そこで起こる変化は自分でも気づかないほど小さいかもしれませんが、以前は気に留めなかった景色が目に入る。誰かの話をもう少し聞きたくなる。子どもの思いつきを一緒に試してみたい。出会ったときには言葉にできなかったことが、しばらくして自分の感じ方や行動の中に現れることもあります。この秋の大石田の美しさを、次の世代はどのように受け取り、育み、守っていくのでしょうか。

そのためには、まず私たち自身が、この町の何を美しいと感じ、何を大切にしているのかを見つめる必要があると思います。そして子どもたちにも、自分の目で発見し、自分の言葉や身体で表現する機会を手渡していきたいと思っています。

秋の時報に耳を澄ませ、風景や香りを感じながら、いつもの町を少し違う目で眺めてみてください。あなたが目につけた大石田の美しさを、次の世代とどう育んでいけるのか。ぜひ、皆さんとそんな話をしてみたいと思っています。

虹のプラザ文化芸術プロジェクト統括マネージャー 大橋武司

：町長コラム

「次世代へ虹をかける」

『新そばまつりを前に…』

皆さん、こんにちは！

9月中は長雨が続き、農作物への影響も心配されましたが、10月に入りようやく秋らしい気候となりました。過ごしやすい一方、朝晩はぐっと冷え込むようになりまして、どうぞ体調に気をつけてお過ごしください。

さて、今年も「大石田町新そばまつり」が、10月31日(土)、11月1日(日)に開催されます。私自身、そばが大好きで、そば打ちや食べ歩きも楽しんでます。新そばの豊かな香りと味わいを思い浮かべながら、「早く食べたいな」と待ち遠しい日々です。

そばといえば、山形を代表する食文化の一つ。農林水産省の「につぼん伝統食図鑑」では、山形そばの一番の特徴を「多様性」と紹介しています。村山・置賜・庄内・最上の各地で、家ごと、店ごとに工夫を重ね、豊かなそば文化が育まれてきました。

県民食とも言える「ゲソ天」との組み合わせ

vol.34



み合わせ、親鶏のだしが味わい深い河北町の「冷たい肉そば」、山菜やきのこの汁で楽しむ西川町の「月山山菜そば」など、食べ方も様々です。

なかでも「板そば」は、農作業の後などに、長い板や木箱に盛ったそばを皆で囲む「そば振る舞い」に由来するといわれています。地域や親戚の集まりでそばを打ち、振る舞う習慣には、人を迎える温かさが息づいています。

そばは、大石田のもてなす心を受け継ぐ食文化です。今年の新そばまつりでも、町内はもちろん、県内外からお越しの皆さんが食べた瞬間の「にんまりとした笑顔」「うなづくように食べてくれる笑顔」が広がることを楽しみにしています。

大石田町長 庄司 中